

# 平成 22 年 12 月 13 日発売の月刊誌の 記事に対する見解について

平成 22 年 12 月 13 日発売の月刊 A 誌に、国立がん研究センターに関する記事が掲載された。

本年 4 月から、独立行政法人化した国立がん研究センターは、「世界最高の医療と研究を行う」「患者目線で政策立案を行う」という理念を新たに定め、がん難民の問題の解決に向けて新たな様々な取り組みを開始しているところである。当該記事の記載全般については、当センターの理念や取り組みの趣旨をご理解いただいている内容だと考え大変感服している。

過去の国立がんセンターの内容に関してはコメントはできない。しかし、現在の（独）国立がん研究センターに関する記載の一部にエビデンスに基づかない記載があり、国民や患者の方々に対し、新たに生まれ変わった国立がん研究センターが、「職員一同が結束してがんに立ち向かっていないのではないか」という誤解を与えるのではないかと危惧し、ここにコメントを記す。

「自分に反旗を翻す人は切る独断型の人」という記載は、何のエビデンスもない。人事はすべて理事会を通し、理事長権限で解雇した人間は一人もいない。理事会の議事録はホームページに掲載しており、参照されたい。従って、この部分は、何かの思惑か裏をとらない記事と推察せざるを得ず、大変遺憾である。

以上、今回の記事の一部の内容については、がん患者を含めた国民の方々、及び、「All Activities for Cancer Patients（職員の全ての活動はがん患者のために!）」という標語のもとで努力している国立がん研究センターの職員へ誤解を生むと考え見解を記すこととした。

なお、今回の見解において雑誌名を「A 誌」と匿名化したことは、本見解が、逆に当該雑誌を宣伝してしまう可能性を考慮した。

平成 22 年 12 月 13 日

国立がん研究センター理事長 嘉山 孝正